

318 特 255

267

6

校長 梨羽時起閣下

心身改造

靈動氣合術

氣合治療法

講義錄

第二篇

東京 大日本靈學通信學校



始



318 特

267

6

校長

海軍中將從三位
勳二等功三級男爵

梨羽時起閣下

心身改造

靈動氣合術
氣合治療法

講義錄

第二篇

東京
大日本靈學通信學校

時 255
6



心身改造靈動氣合術講義錄

大日本靈學通信學校講師講述

第二持心篇

緒言

柳は緑花は紅、馬を鹿と言ひくろめる力はありとも、柳花の色如何とも致し難きは、確かに眞理ながら、さて人間と言ふ不思議な動物は、更に精神と言ふ靈妙不可思議なものを持ち、四肢五體は之に支配されてゐる。然れば心に嬉しと思へば今迄

第二持心篇



の涙の露も、何時しか晴れて笑顔を見する習ひ、人ちがひと知らず、只管に父の横死と打ち嘆いて、果は息も止りて命失ひし孝子ある世の中、實に心の持ち様が肉體に及ぼす、影響は至大なるものである。

彼の道を説くのが、古來幾多の戒律をまうけて心の持ち様を教へ、意馬心猿の狂ふに任かせて、畜生と等しくならむことを恐れたのは、實に意味深きことであると言はねばならぬ。

予等曩きに端心正意篇を書くに當り、心身の兩方面より觀て至完なる人たるを得べき道を説かんとし、而も其の心的方面の用意の、重大なるを忽にする能はず、別篇にすべきことに定めたのであるが、今此所に之を概説しよう。

佛家は五戒を説いて、人間たることを得るの最低限度の、心的用意なることを示し、十戒を説いては、同じ人間ながら王侯たるに要する、最小限度なる徳としてゐる。

予等が左に章を逐ひ、節を分つて説く所、また氣合術者として心得ふべきことの一般を示したもので、更にヨリ以上の修養と工夫とは、單へに諸君の研鑽に待つのである。

凡そ如何なる事も、不斷の努力と、充分の覺悟とを以つてしなければ、到底彼岸の到達に、心を悦ばしめることは難いのであるが、特に心的修養の如き、何時迄之に努むるも、更に自ら殆んど進境を自覺することの難い様なものに就いては、猶更である道に志す者は、十二分の覺悟と、努力と、戒心とを要する。

第一章 積極的持心律

第一節 正念

人生の第一義は、其の想念を正しくするにある。心性が其の根源に於いて善なりや、惡なりやと言ふ根本問題の解決は別として、確かに吾人の心想の中には、人間

生活に適應せざる悪性のものがある、之を以て、性是れ悪なりとするならば、其の悪を去つて正善に就く可く、之を以て根本性の外に生じたるものとすれば、之を避けて正善ならんことに努力すべく、煩惱、即、菩提、善惡一如とすれば、之を轉じて正善なる菩提に住まさせなければならぬ。

進化論者が、人間の祖先を以つて猿猴に擬するにも拘らず、少くとも今日の人類が、他の動物と先天的に相異なる所以は、實に人間が思想的生物たるの點にあり、正想念を有する點にあるのである。

彼の智情意の如き心的作用は、其の程度の差こそあれ、何れの動物も皆之を具有するものであるけれども、唯此の思想、即ち正想念に至つては、人類を除いて未だ自餘の生物中に、之を認むることを得ざると共に、更に自から想念のために生き、常に想念の正しからんことを努力して、其生を正しからしめむとするが如きは、人類を措いて他に遂に覺むることを得ざる所である。

然るに生存競争の激甚なるは、人をして先づ目前の衣食のために奔命につからしめ、日夜唯だ衣食と利慾につきて苦慮顧念するの外、何物もなく、人間生活の第一義諦たる正想念の如きに至つては、夢にだに見ず徒らに他人の暴富を羨み、一圓半圓の事に其の節を曲げ、節を屈し、何等其の生の根蒂に安定、安住なく、世を擧げて、滔々其の濁濁を構成し、構成して底止する所を知らない。寔に是れ人間の動物化ではあるまいか。

彼の世界的大戰も、人間が其の正想念を離れて、互に物慾に相争ふたるものではあるまいか。

今日の露西亞の現状を視るもの、誰か之を憚りもなく是れ思想の争ひ、動搖であると言へよう。相互に慘虐を敢てするも、掠奪を事とするも、遂に強奪のためではないか。

實に憂ひ、悲しむ可きの秋なると共に、各自相戒めて正想念に住して、自から困

感ぜざる様、心掛けねばならぬ。

過去の世に於いて、人類の思想、想念の中心樞軸となりしものは、當代に於ける宗教であつた。哲學的研究の結果到達する信念、亦想念の樞軸たり得るのであるが之は萬人に望むことは難い。人間は現代に於いても、遂に其の想念の根帯を宗教に置かねばならぬ。而も現代に存する宗教と言ふ宗教は、遺憾ながら吾人の絶対信仰を繋ぐに足るものが殆ど少ない。勿論、部分的には信仰し得るものもあるが、概括して何となく過去の宗教の残骸を眺むるの感があるのみである。

此所に於いてか、吾人は其の正想念の歸趣を究めて、途に迷ふの感なきを得ないのである。然れども安んぜよ。我が靈氣合術を學ぶの士、靈能を啓發して術を信じて之に依頼することを得るが故に、直に宇宙の本體、宇宙の原靈に參じて、以て我が想念の正しき歸趣を得るのである。

然れば現代の人の病患を救ひ、且つ直に現代を導き救ふためにも、己が身の宿病

を癒し、其の正想念に歸趣を得て、心の安立を計り、以つて己を救ひ、人に及ぼすためにも、來つて吾人が靈氣合の術を學ぶ可きである。

第二節 正智

正智とは、不奇、不偏に事物に對する智識を有することである、正想念は、正智に依つて涵養せられ、培養せられるのである。

彼の古代の未開の人類が、其の知識卑うして、宇宙現象に對する正しき理解と、知識とを有せざるが爲めに、木石を拜し魚介を拜し、風雨電先を視て、以つて直ちに神とし、尊信措かざりしが如き、迷信は斯の正智なかりしに、起因するのである。

正智なくんば事物を正當に理解すること難く、既に其理解せざる所あらば、之に對する判断處置の正當を得ることの望み難いのは自明の理である。

今日の彼の科學者が、宇宙の殆んど凡てのものに解釋を下しながら、未だ生命の本

源に對しては、千古のまゝにして、何等解決し得ないのは、其の因一つにして止まらざるべけんが、主として靈的方面の存在を否定して、徒らに唯物の一路よりする偏頗あるがためである。更に彼の宗教家達が、正しき事物に對する科學的知識の上に何等の根柢なき迷妄憶説の上に築かれたる無樓の如き迷信を不安心ながら、己れも服し、人にも強ゆる所以は、唯心に即して事物を正觀正察し得る正智を、缺如せるに起因するのである。痛ましき限りなる哉。

生存の競争は、何時の時代にもあることであるが、現代の如く甚しいのはない。尠くも結果に於いて、競争の激甚さは過去の、何時の時代にも比すべきものがない。

一二奸佞なる黨が、傲奢なる生活を爲せる周圍に、幽鬼の如く青めいた、殆んど骨ばかりに近い人間が、ヒヨロ／＼としてウヨメキ、最後の死力を盡して、パンの片を漁つてゐる如き様である。従つて人類をして、物質に對する執着から、暫くて

も心を離なすことを許さない。

十九世紀以來人類を支配した唯物主義と、斯の如き現下の大勢とは、相倚り相扶けて、其の勢を甚しくし、舉世滔々物質的知識にのみ偏奇して、精神的知識、更に進んで靈的知識の研鑽修養を許さないから、人は益々正智を得るに遠く、正智正念を得ざるが故に、愈々其の濁濁を甚しうしてゐるのである。

斯かる勢を以つて進んだならば、人類は其の物質化の極、意に死滅あるのみである。

併しながら、人間は滅びるために、生を此の世に稟けたのではない。自然、其處には生を保護する力と、道とが備はつてゐる。人間の努力が足りなかつたのか、或は其の方向を過つた爲めか、不明であるが、兎も角行き詰つた結果は、彼の大戦となつて、幾分か行き詰りが寛和されたのであるけれども、之は更に又慘虐事を觀ることを豫期せしめる。吾人は其の生を保護するために、更に他の方法に依らなければ

ばならぬ、夫れは靈的方面の研究修得に依つて、正智を得、正念に住して行き詰まらざらんことを、企圖するにあるのである。

唯物主義者が、空前の奇蹟とし、驚異とする氣合の眞靈現象の力を借りて、現代の暗黒に一道の光明を投げ、衆を誘ひ導いて之を救ふは、吾人術に忠なるもの、宇宙の眞靈に誠ある者の、當になすべき所である。

彼等頑固の徒も、一度靈的現象に目覺むれば、長く閉ぢたる正智頓に開けて、自ら道を求めて安きを得るである。

第三節 正情

人は感情の動物であると言ふが、喜怒哀樂の情は強ちに人間のみにも有るものではない。其の程度にこそ相違があるが、一般の動物の有するものなることは、殆ど何人も反對せざる所である。而もなほ人間をのみ感情の動物なりと言ふ所以は、感情

に依つて、動くことが、甚しいことを言つたのである。併しながら、怒り易く、悲しみ易く、常に感情の正鵠を失する時は、其の行動の常を失し易きが故に、道に志すものは、徒らに感情に支配されて、心に偏奇を生ずることを戒めねばならぬ、七情を、色に現はさないのを、偉人傑士として敬し、君子は怒りを移さずなど言つて、感情に支配されざることを尊んだのは、人間は本性に於いて、感情的であり兎角情の動くや、熾烈であつて、正念を破り、正智に反して、なほ行動するが如く動もすれば常規を失するものなるが故に豫め之を戒めたのである。

彼の歐米の人は、寧ろ感情を最も露骨に、色に現はすを喜び、實に能く哀み、能く喜ぶのであるが、吾人は俄かに之に與することを得ないものである。

其の種類の如何を論ずることなしに、誠に能く感情が陶冶されて、常に正情を保持するならば、徒らに激し、妄りに悲み喜ぶの極、狂はしき様するやうなことは無かるべき筈なのである。

感情を色に表はさずとか、移さずとか言ふ意は、決して悲しみに逢ふて、哀まず
 樂みに遇ふて之を喜ばず底な、反人情を強ふるものではない。色を包んで、心に之
 を悲喜することを教ふるのである。全然無神経たれと言ふのではない。
 人性を語らんとして、野獸の例を用ふるは聊か憚り多きことながら、象、獅子の
 如き大獸は、容易に其の喜怒を示さない。猿、猫の類は、僅の事にも容易に怒り、
 容易く恐れてゐるのを以て觀ても、偉大ならんとし、眞正念に住する正しき人たら
 んとする者は、努めて其情を色に表さざる様、心を修むべき必要あるは明であらう。

第四節 正意

正意とは、正しき意志を言ふのである。人が世に立ち、其の事業を遂行するに、
 固より意志なくしては之が成就を望み得べきでないことは、自明の理である。
 人の人たる所以は、實に意志の力にあると言ふも、決して過言ではあるまい。意

志が一切の想念、感情を支配して、各種の動作の之より出づる所以を以てすれば、
 人の人格も、畢竟は意志であると言ふことを得よう。
 意志の伴はない所、其所には責任ある行爲はない、自然其所に、人格を成さない
 と言ふことを得る。意志の支配の擴大は、人格の偉大であり、進歩である。更に意
 志の支配の正しからざる人、換言すれば、正意志の支配を受けざる人間は、それは
 假面の人、生理學上の人間であつても、眞乎の道德的人間ではない。所謂畜生なる
 者である。
 未開の人の如き、小兒の如きは、正邪善惡の判断たる、正智に缺くる所がある計
 りでなく、其の行動を律する意志の力の範圍が狭小であつて、殆んど日常動作の大
 部分は、本能的盲動に過ぎないのである。是れ文化の人、大人の群と、同一に律せ
 られない所以である。
 言ふ迄もなく、所謂意志とは正意を指してゐるのである。此の意味に於ける意志

は、又人間と一切の他の動物と相分かつ、一つの標準であり得る。
 若し人間に此の正意がないならば、何等人間夫れ自身と、他の自然現象と擇ぶ可
 き點がないのである。物理学の原則にも従はねばならず、一般生物學動物學の原理
 原則の支配を受くる一於の自然現象でありながら、古來多くの場合に於いて、人間
 と自然とを分界し、相對立せるものとして考へ來つた、唯一の境界は此の正意の有
 無にあるのである。意志に依つて統一される、人格の有無に依つて境づけられるの
 である。

高尚なる感情を有すると言ふも、進歩發達した知力を有すると言ふも、若し正意
 を外にして之を見るならば、人間は矢張り自然界の奴隸であり又自然界の現象た
 るに過ぎない。

實に意志は人事を決する起點であり、終點であると共に、其の中間に介在する一
 切を處理し、意味づける唯一の力である。正念も、正智、正情も、遂に正意なくし

ては之を實現すること難いのである。常に正意を確持して、之が貫徹を圖り、全人
 格の完成を期したいものである。

第五節 正 行

端身、正行とは、是れ古來道に志せし者の、須臾も忘れざる所である。端身とは
 身を持つること、端正重齊なることを言ふのであつて、正行とは、其の行爲の正し
 くして、道に適へるを言ふのである。

前四節に亘つて心的方面の正しかるべきことを説いたが、此所には身的方面より
 其の正しからんことを説述する。

如何に正念を持し、正智正情正意になるとも、其の行爲にしてこれに伴はざれば
 其の違に非ず、又總てのものに何等の價値なきのみならず、却つて心を傷り、身を害
 ひ、延いては家を破り、世を毒するに至ると、言はねばならぬ。

併しながら、行爲は身體の動靜であるけれども、他に何等の聯關を有たぬものではない。心の内を通じて表現せられたものが、行爲である、何の考慮もなく、行爲獨り表はれると、言ふことはない、正行は、畢竟は正念、正意、正智、正情の相交渉、合致したるもの、發露表現に過ぎない。即ち正行には正に正行の根帯がある。斯るが故に、正行を爲さんとする者は、常に其の根源たる念と、智と、情と、意とを正しく涵養して、更に之が表顯たる行爲の正しからんことを期すべきである。古諺に『貧の盗人戀の歌』なるものがある。其の行爲の根抵には、正を持しながら、具體的な現實な生活の必要から強制せられて、遂に正行をなさず不正行なす事あるを戒めたものである。吾人は常に戒心して其の身を持し『武士は食はねど高揚子』の概と『君子は渴しても、盗泉の水を飲まず』底な正とを遂げねばならぬ。一つの行爲にして、正しからざらんか、千百の正念も、正智も、乃至正情、正意も、共に全然無價值、無意義たるに終るのであるから、特に實生活と、相觸れ、社

會と相關して生ずる行爲に一段の注意を拂つて、其の正を持することを念としたいものである。

第六節 正目的

人は常に目的を有する。其の行爲の一つ／＼に、必ず何等かの目的を有してゐる。實に目的は行爲の到達する標的である。目的なくんば行爲はない。行爲なくんば、其の人は正に死したるに等しい。

實に目的は、人間の生命である。人に生命あるは、人に目的がある爲めである。目的のために人生はありや、人生あるが爲めに目的を要するやは、古來の疑問であつて、恐らく人間の限り迄、遂に解けざる難問であらう。併し此所には、敢て之を解く必要はない。唯目的即ち行爲の標的が、人間の生活に於いて、誠に缺く可からざる事なる事を言ふのである。

而して此の目的の正邪が、人間の正邪を定むる。正しい目的を有たないで、正しい人間たることは、到底望み得ない所である。是れ此の節に、正目的を説く所以なのである。

天は正を愛し、神は正に與みす、未だ有史以來、惡の終りを遂げたのを聞かない。唯現代の如く、人各其の正智を失し、正念を離れ、必ずしも正しからざる個人の多き代に在りては、往々にして其邪惡なは、其の目的を達するが如き觀あるも、是れ邪惡盛んにして天神に克つもの、其の天神の定まるや、是れに克つて正善に與すべきものである。

永遠に而して確實ならざる、一時的の成功、成就に、幻惑されて、短見者流が、其の正目的を棄て、邪惡の間道を辿らんとするのは、誠に悲しむ可く戒む可きことである。

成功と、不成功とを論せず、邪惡の目的の達成は、遂には身を破り、世を誤る結

果を招致するのであるから、此所に考慮して、一時に幻惑せられざらんことを祈るのである。

邪惡の想念を起して目的を立つる事は、身體に疾病を有する場合に自發的に、亦或は他に桃發せられて起り易い。如何に社會の經濟組織に缺陷ありて、貧富の差甚たしくとも、己が心身の強健にして、爲すこと其の目的を達成せざることなくんば、何の要あつてか邪惡の念を起さんやである。邪惡を惡み、正善を喜ぶものは、自ら吾人が靈動氣合術によりて、其の強健を圖り、進んで世の虛弱者を救ひ、相共に正善の道に進み、正目的に向つて努力すべきである。

第七節 正業

人は、心身兩方面の生活をなすと雖も、先づ身安くして、次いで心恭きを得る。饑えずば盗みもしまじきものと思はるゝ例は、泥棒故の在監獄者に就きて、坐に痛

感せられる所である。一度監獄を訪ふて、犯人に接せんか、今更に其の薄志を哀むと共に『貧の盗人』の一句、さては『又衣食足りて、禮節を知る』の語を想起するのである。

心身相關の理は、争なき真理なるも、身の事情を以て心を支配することの絶対でないと共に、心を持つて身を支配することも亦絶対でない。餓えたる者には終に食を興へ、渴したる者には水を興へる外はないのである。

餓え、且つ渴して、猶心安き者は、我之を遂に人間の間に見出したことがないのである。米騒動と云ふも、東京市内の電車従業員の大怠業事件と云ふも、頃日所々に起る同盟罷業大怠業も、結局は、食はんが爲めである。生きんが爲めである。生の欲求は絶対である。

果して然りとすれば、吾人は食はざるを得ない。併し坐食すれば、山も猶空しき譬であるから、人間は勢働かねばならぬ。食と生との前後、主従の如何を論定す

るよりも先きに、先づ業に勉めなければならぬ。實に業に勉めることは、吾人人間の天職である。當に生を斯の土に稟し者の義務である。而して其の業に、常に正しかるべきを要するのである。

然かるに之を現代人に見るに、其の經濟的生活の根帯の動搖に對する不安を感じ業に勞しむ可きことを承知し理解し、且つ覺悟せるにも拘らず、偶々一時的の成功に傲奢を誇る成金者流の行動に、其の正念、正意を困惑され、總ての階級を通じて、投機的精神の横溢を見るのである。曩年議會に於いて問題となりたる。臺閣諸公の如き、遂に其の地位を利用して、投機的成功を企つる者あるに至つたのである。時世の罪とは言へ、各自が其の人生の根帯に觸れたる、正目的と、強き正意とを有せざるに基因するのである。

斯の如くにして、人皆な正業に就くことを避け、浮草の如き、僥倖的、投機的の業に成功せんとして、血眼となるに至りては、國家の前途に、憂ふ可きものがあるの

である。

予が此所に正業と言ふは、自己の天職を大覺して就く業を指し、事業に對する知識と、觀察との正しきものを有し、覺悟ある業に、從ふを意味するのである。

元來人間は活動すべく決定せられ、運命づけられて、此の土に生れ來りたるものであるから、其の生命の存する限り、何等かの活動、何等かの業務に服さなければならぬのである。

彼の我が國古來の制度なる、隱居の制は此の意味よりして、誠に無意義有害なるものである、如何なる人も、其の生を終る迄、自己のため、乃至社會國家のため、業に服す可きが、人間の本務である。

世には生産的事業、不生産的事業なる分類を爲し、直接生産に従事せざる軍界思想精神界の事に從ふを以つて、不生産的事業なりとし、社會に無用なること、正しからざる事業の如く考ふるものもあるも、既に人類の生存に、將た又國家の生存に

必要缺ぐ可からざるものなる以上、直接物品の生産に關はるや、否やを論せず、正しき業なりとする。

各自其の適する所に從つて、正に正業を選んで奮勵努力をなすべきである。

實に懈怠は死である、努力勤勉は生命である。若し人如何に正業を撰擇するとも如何に其の天職を自覺するとも、之を正勤せざれば、遂に何事をもなし得ない。

西諺に言へることあり。「天は、自ら、助くる者を助く」と。運は天に在りと雖も進んで之を取るは人の力である、未だ人事を盡さずして、天命を俟つものは、仰臥して牡丹餅の棚より落ち來るを待つと、何等異なる所はない。

既にして人は活動すべく、正勤努力すべく、決定せられたる運命を有するものなりとすれば、從順に此の運命に従ひて、専心正勤するものこそ、天意に適ひ、人生の眞義に自ら適ふ所以である。

勤勞の暇に、味ひたる無爲の快樂を、夫は勤勞正勤を前提として、感ずるものな

ることを忘れ、放逸なる人間の慾は、動もすれば無爲放逸を希ふが如きことがあるけれども、一生を通じて、無爲放逸なることは、到底人間の耐えざる所である、必ず何事かに努力し、勤勞をせなければ、却つて苦痛を感じるものである、即ち、勤勞は人間の本性の然らしめる所である、何人も、積極的に、向上的に、己が選びし正業に對し、勤勞努力すべきである。

第二章 消極的持心律

第一節 財 慾

財とは、吾人の經濟的生活に於いて、我等の欲望を満足せしむるに足るものを指稱するのであるが、此所には、特に有體財産、即ち吾人の物的生活の必要を、満足するに足るべきものを指稱する。

吾人の生活に、心身の兩方面を有する以上、而して先づ身的方面の生活が、人生

の第一歩である以上、財慾は人間の生活に必然隨伴すべきものであつて、之を滅除する事は、即ち人類の生存を滅除することを意味する。

別篇にも説述したるが如く、人生の目的は肉的生存發達にありや、靈的生存發達にありや、換言すれば、生きるために食ふか、食ふ爲めに生きるかの問題は、之を吾人の靈性の判断に問ふて、目的生活をする上からは、明かな解釋が與へられてゐるのであるが、生きることの自覺なき、幼者、狂者、癡癡の如き者も、食ふことを知り、食ふために生きるが如き事實の上からすれば、全く未決のまゝであつて、實に千古の謎とも見えるが、併し人間の生存は神意であるからである、兎に角其の答の如何を論じないで、吾人の生活、生存の第一歩が食ふことにあることだけは、之を人間の第一歩たる、嬰兒、幼兒に就いて、知ることが出来る。

既に、吾人の生活の根柢が、身體的、肉的生存にあるとすれば、之を養ふ可き財を求むることは、吾人の天與の横利である。何人の如何なる力にも、阻止せられざ

る権利である。天神地祇の深意、遠慮に適ふ大権利である。

若し此の権利を否定するならば、其れは吾人に、滅亡を強いるものである。生めよ、殖えよ、地に盈てよと、祝福されたる吾人ではないか。生む爲めに、殖える爲めに、而して長く活きて、地に盈つる爲めに、財慾を委にするのは、實に此の祝福を虚しうせざらんとする眞面目なる、忠實なる努力ではないか。

彼の生存競争と云ふことを、肯定することは、一切の生物に、此の天與の権利あることを認め、各自に其の主張を許し、而して其の権利と、権利との衝突を客觀視して、肯定するのではないか。

要するに、吾人は日々、夜々に、四圍の者を征服して、生を續け、生を旺盛ならしめる権利がある。

彼の人類社會に秩序を確立保持して、人類社會に幸福を與へんとする、國家現代の思想に於いて、最も進化せる人格と認む可き國家に於いて、常に互に財慾を争つ

てゐるのにも、明らかなることである。

併しながら、其の主張の程度に至つては、容易に之を決する事を得ぬ、換言すれば、財物の所有權を、個人に與ふ可きや、國家のみに與ふ可きや、更に財は、人類の共有にして、所有權の觀念を容れざるものなりやの根本思想の解決、及び所有權の觀念を前提して、富の分配の問題は、容易に決し難い問題である、又之を研究するは、本篇の目的でないから、是には觸れぬことにする、

唯尠くとも、現在の法制と、大多數者の考には、夫れ々の限度、夫れは數量に於いてとなく、其の財の獲得の方法に於いてが、あることは明である。

然かるに、吾人は、ともすれば、此の程度限界を越えて、財を擱取せんとする傾向を有する。財欲の念の強さに比例して、其の傾が甚しい。此の傾き、此の望が其の人を害ふ計りでなく、國家、社會を荼毒することが甚しい。是れ此の章を草して、世人に注意せんとする次第である。

財慾の主張は、吾人の天與の權利であつて、之を滅除すれば、即ち自己の滅亡あるのみであつて、而も其の極端なる主張は、自己及び社會國家を毒するものとすれば、如何して、其の調和を取るべきであるか。

夫は誠に單簡である。生存に必須なる此の財慾は、盲目なるが故に、之に前後四圍を洞觀し得る、理性の眼を附すればよいのである。良心の正念の指導、制御の下に發動せしむればよいのである。

古來東洋の道徳は、各種の方面に向つて、禁慾を説いたのであるが、其の眞髓は決して一切の欲念を絶滅せよとの意ではなかつたのである。兎角く、盲動濫動、無節制、無秩序に墮ち易い物慾を、適當に發動せしめんが爲めに、説くに禁を以つてしたのである。聞くもの、傳ふるもの、よし其の眞髓を體得し得ないで、極端なる禁慾を説いて、遂に及ばず、人生を空を漠々、無意義に了はらんとしたものがあるに至つたのである。眞諦は『盲動を避けよ。』の一語に盡きるのであつたのである。

古今東西を問はず、至人の言ふ所は一途である。吾が靈動氣合術を學ぶるの士は、克く此の意を體してもらひたいものである。

第二節 名 慾

人は如何なる境遇にあるも、常に財慾、名慾の二慾から離れることはない。前者は直接生活の根柢である爲めであり、後者は生活をヨリ強大にヨリ旺盛ならしめんとする努力に出發して、他に優勝せんとする過程を経て、其の優勝を得たりとする満足と、他の崇敬尊信に依りて、其生活を、安固ならしめんとする願求の二者よりして、名譽慾なるものを有する。

之を客觀的、過程に視るならば、凡ての人の表現したる知識、意思、感情等の卓絶に對する世衆の讚美、嘆稱と、之に對す尊崇、服従をなすに至つて、確立せられたる名譽を見るに至るのである。

斯くて人類の心内に萌芽した名譽心は、代を經、人を代へるに従つて、人より人に傳はり、次第に力強い慾望となつたのである。現代人に於ける名譽は、蓋し物慾即ち財慾と、其の強烈の度に於いて、伯仲の間にある。

或は曰ふ、世には全く名慾を缺けるものありと。果して然らば、其れは死人である。死に瀕して、自我の意識をも失へるものである。此の二者にあらずして、なほ名慾なきが如きは、其の形を變じたる迄である。仔細に觀察すれば、其の然かる所以を、首肯せられるのである。

然らば、此の名慾の利害、如何と言へば、名慾は人生の向上に、原動力を興ふものであると言ひ得よう。人間の生存、生活が、其の向上發展のためであるならば、實に名慾は、人界に在らざる可からざるものである。

哲人は言ふ、大宇宙は、其の進化向上に向つて、努力しつゝありと。靜かに、天地の事象を觀れば、一木一葉の微も、其の進化向上に努めつゝあることが觀取せら

れる。特に、人間に於いて、甚しいのを見る。實に、人類は社會を形成し、國家を組織して、自覺的に向上發展に努力しつゝある者であつて、其の向上的なる事は、宇宙間の何物にも勝つてゐる。従つて、名慾は人生を意味づける點に於いて、第一であり、直ちに物慾に次ぐ人生必須の力である。

併しながら、過ぎたるは猶及ばざるが如しであつて、餘りに強烈なる名譽慾は、遂に不當不正の手段に依つて迄も、之を得ようとして、人間の努力を誤らしめる。名譽の外装したる權勢を得んが爲めに、不正、不當の努力を試み、爲めに身を亡し、家をけがし、世道、人心を損したる例は、尠くないのである。是れ此所に吾等と、志を同しする吾が靈動氣合術者に告げて、相戒めんとする所以である。

吾人は個別的生存をなすものでなく、吾人の生存は、社會に於いて、其の立脚點を發見する、一切の生物が、周圍のものより、其の營養を吸収して、生存發達するが様に、我等は、我等の周圍より、一般原則に従つて、營養を吸収すると共に、更に

其の立脚地たる社會から、營養を吸収して、生存發達すべきである。此の社會から得る營養とは、即ち名譽である。名譽の實質たる權勢である。

併し、此の名譽は、自己の眞價に對する社會の批判、正しき批判でなければならぬ。換言すれば、自己の自から負ひ、自ら衷心に満足し得る所ではなくてはならない、畢竟、名譽も亦理性の制御に委すべきである。

第二節 色 慾

人類生存の目的の何であるかは、幾度も述べた様に、儘に千古の疑問であつて、或は恐らく解けることのない難問題であるかもしれない、此の問題に對して、其れは種の保存である。生存の繼續繼承であると答へるのは、問に對して、其の間の形式を變へて、應へるものであるとの批評を免れないであらうが、生物の目的は、其の種の保存、繁殖、即ち自己の延長、發展、進化であることは、現代科學の實證し

てゐる所である。

人類とても、此の域は脱しないと言へよう。既に種の保存、繁殖が、其の最高の目的であるならば、之を遂行する唯一の手段たる、生殖現象は、最高、至善であり、之が原動力たる色慾は、蓋し、神聖にして、絶對であると言はねばならぬのである。之を抑制し、之を絶滅せんとすることは、殆んど、不可能の事であり、罪惡であると言はねばならぬ。

若し絶滅が、可能であるとして、其の結果を想像したならば、人類は滅亡の外はない。更に此の思想を以つて考へたならば、地上に於ける一切の生物は、絶滅して混沌たる乾坤のみを残すものとなるべく、更に進んで考へたならば、宇宙は無に歸さねばならぬ。斯かる考へは、何人も是認することなく、何人も考ふるにさへ堪へ得ない程、そんなに此の生殖の癡絶と言ふは難いことである。勿論之を抑制することも、重大なる罪惡である。

最近避妊に就いて、問題の沸騰した時、精神家を以て任じ、精神家を以て許される人は、總て之を罪惡視したのであつた。併し夫れは、性慾の肉感を満足しながら、唯生殖をのみ避けようとするをにくんだのであるが、此の精神を煎じつめると、彼の宗教家の間に見る、生殖慾の禁遏は、矢張り罪惡である。彼等は角をためて、牛を殺した愚人である。

種の蕃殖の爲めに、賦與せられた、使命を果すべく、之を正しく行ふ義務を、人間は天に負つてゐる譯である。

併しながら、之を放漫にすることは、更に罪惡である。禁絶すべきことである。

由來、この生殖の作用は、親の肉體を、消耗すること甚しいのみならず、更に扶養の重荷を負担するから、動もすれば、其の本務を忌避するものを生ずべきが故に天は之に絶大の快美を伴はしめた。否な人の好ましき感味を伴はしめた。

實に、此の冷靜の我に返つて考へる時、餘りに馬鹿氣た心持のすることながら、

此の感あるが爲めに、情に弱く、意思薄弱なる人間は、之を放漫に行つてゐるのである。

人間が、其の目的を達成するために、社會、國家を組織して以來、其の秩序を維持する必要の下に、一夫、一妻を定め、夫婦の契りをなし、其の間、情を二三にしないのは、確に一段の向上進歩であるが、其の色慾遂行たるや、實に一退化を示して、放漫に流れてゐるのである。生殖の目的を外にして、享樂の爲めに之を行ふの有様である。

色慾の絶對美であり、神聖である所以は、人類生存の目的に副ふ可く行はれたる生殖を意味する場合に限るのである。之を放漫にして、從らに、心身を消耗するが如きは、行を神聖視する、根本に反するのである。大罪惡と云はねばならぬ。夫れが、更に疾病を醸し、或は犯罪の動機となり、社會の秩序を紊亂するに至つては、罪此の上なしであると言はねばならぬ。

實は、色慾は、其の種の蕃殖のためにのみ發動を許され、之が爲めに發動するは神聖であり、至善であるが、放漫、是れ唯肉慾の満足、享樂の爲めに發動することは、戒めねばならないことである。

第四節 慢 心

「慢は損を招き、謙は益を招く」とは古來の教へである。併しながら、予を以つて之を見れば、慢と謙とは、兩つながら之を嫌忌するのである。

慢とは、自己を光耀せんとする優勝心が、其の満足を得ざる場合に、自己を光耀ありとし、優勝せりと自負して、他に誇る所の感情であり、謙とは、慢を惡徳として、惡むの極、自己を其の眞價以下に評價して、他に對するの感じてある。謙は、慢に比して、他に對して、不快の念を興ふること尠しとするも、其の中正を得ざる點に於いては、全く同じである。共に避く可きである。人は、如何なる場合も、唯

有りの儘に、其の人格を現してあればよいのである。人格を變じて、人に接せんとするのは、其の變じ方の、大小、高下に論なく、共に狐狸の屬ではあるまいか。

人類が、其の最高目的を遂行するため、唯一、最善の方法として、社會、國家て組織體をなしてゐる。組織體の遺憾なき活動發展は、即ち人類が、其の目的に近よる方途である。而して、此の社會の活動は、整へる秩序を基礎とし、秩序は、各人の禮法を守ることによつて、維持される。而して、慢は此の禮を紊るものであるから、道に志す者の心せねばならぬことである。

慢の一種に、稚氣、衝氣なるものがある。共に慎む可きは、言を俟たぬが、此に特筆すべきことがある。夫れは、公衆の中にて、用もなきに、己れ物知り顔に、氣合術の奇現象と、衆目に映ずることを言説し、之を行ふ可きでないといふことである。此の慎が缺けたならば、多くは其の人の豫期に反して、衆目の疑惑の標的となり、場合によつては、侮辱、輕侮をさへ、受けることがあるからである。

第五節 憤 怒

憤怒とは、自己が現在する不適意の境から、無理に離脱せんとする努力であるとも言ふ可く、又自己の害敵を威嚇して、之より不自然に逃れんとする、努力であるとも言へる。何れにしても、吾人の心身を、現在に於いて、益するものではない。古人の教へに、「怒は敵と思へ。」とある。心理的發達の歴史は、先きに説きたるが如く、原人時代に敵を見て起つた情の遺傳であるが、現在は、確に心身を害し、道を破るの情である。

由來、氣合を學ぶの士は、其の心、常に平靜にして、明鏡止水の如くなるを要する。怒は、實に平靜なる池水に投ずる大石である。其の靈能の啓發及び術の實行を害するや甚しいのである。

その他、怒の害を挙げれば、消化、呼吸、循環等、凡百の生理作用の阻止、障

害を起して、健康を害し、判斷思慮を亂して人を誤らしめる。實に憤む可きである

第六節 誦 詐

對者に對して、自己を誇耀し、以て、其の優勝心の満足を得んと計つて、而して其の資なきの時、或は何物かを求めんとして、之に對する對價を有せざる時、其の資料、對價を捏造して、之を提供、呈示しなければ、對者の感心を買ひ、讚歎讃仰を受けるとの出来ない場合がある。此所に詐妄は生じ來るのである

誦詐の惡む可きは、今更言ふ迄もない。自然、此所に格段の筆を勞することを、嗤ふものであるであらうけれども、他の如何なる場合よりも、精神現象を研究し、之に携る場合に、衆目を欺瞞し易きが故に、往々誦詐の行ふ、が爲めである。

一時の名譽心の誤りたる満足のために、詐術を用ふるさへ、世を害するのである更に不正の財慾と結合して、騙詐以て利を謀るが如きは、恐れても、猶恐れ慎む可

きことである。

第七節 誹 謗

佛陀は、大無量壽經の中に説いて曰く、「彌陀の大慈悲は、能く一切の罪障を消滅せしめて、一切衆生を淨土に往生せしめ、不摂轉を得しむれども、五逆のものと、正法を誹謗する者は、論外である」と。誹謗の如何に惡徳なるかを、知るに足るではないか。

誹謗とは、他人を嫉視し、其の缺陷を指摘して、之を陷害せんとする情である。是も畢竟優勝心を満足せしめんとする誤れる方法である。

他人と、自己とを比較して、其の自己の優勝を感ずる方法は二つあつる。一つは、實際に自己の彼に勝れた場合である。今一つは、他人を卑きにつき落して、己れ其所に存する場合である。

宇宙は進化を目的とし、人生は向上を目的としてゐる以上、自己の優勝を企圖することは、正善であるが、他人を陷害し、其の向上を阻害することは、深く慎まねばならぬ、社會の秩序を紊して、間接に罪惡たるばかりでなく、誹謗其の者が直に至大なる惡である。

第八節 憎 惡

憎惡とは、對者の不幸をよろこび、進んでは、對者を攻撃して、之を不幸困難に陥らしめんとする情であつて、別篇治療篇に於いて、術者の必須的、心的準備として、説述したる同情、親切の反對面である、其の陰性に發する時は、嫉妬となりて偽善者、虛榮者等の苦しむ所となるのである。

嫉妬も、憎惡も、二つながら對手あつて發するの情であつて、他人の發達向上に自己の情を苦しめ、他人の失敗苦悶をよろこぶの劣情である。仁徳をきづつけ、他

318
267

の尊信、悦服を阻止、阻害して、自己の徳望を損する甚しいものである。心小なること、婦女子の如きもの、名を求むるに急にして、他を顧るの暇なき者、特に一層の注意を要する所である。

以上八節によりて、消極的持戒の、最低の限度を示したのである。更に一考すれば、持す可き戒律は多い。各自其の心身を顧みて修養研鑽、以つて靈動氣合術修得者として術滞りなく、人間として最高の心的生活を営まれ度いのである。

戒律は、無盡なれば、多々之を擧げること易いが、然りながら、之を守らざれば、一戒なきに等しである。

浸染既に久しくして、身業に怠慢、一戒を勵むも、ナカ／＼容易でない。自然完脱を期せずんば、術者たるを得ないと云ふのではない。勤くとも、只一步、世衆より擡んでゐよ、而して衆を導けと云ふのである。

大正十二年五月五日 印刷
大正十二年五月十日 發行
大正十三年十二月二十日 改訂三版
昭和三年五月廿日 改訂四版

非賣品

不許
複製

編輯人 桂 六十郎
東京府下北區葛飾町同ヶ谷九百六十九番地
印刷人 高橋 利惣次
東京市小石川區同ヶ谷町十二番地
印刷所 高正堂印刷所
東京市小石川區同ヶ谷町十二番地

發行所

東京市外高田町同ヶ谷九百九十九番地

大日本靈學通信學校

電話東京五八四七九番

318
267

の尊信、悦服を阻止、阻害して、自己の徳望を損する甚しいものである。心小なること、婦女子の如きもの、名を求むるに急にして、他を顧るの暇なき者、特に一層の注意を要する所である。

以上八節によりて、消極的持戒の、最低の限度を示したのである。更に一考すれば、持す可き戒律は多い。各自其の心身を顧みて修養研鑽、以つて靈動氣合術修得者として術滞りなく、人間として最高の心的生活を営まれ度いのである。

戒律は、無盡なれば、多々之を擧げること易いが、然りながら、之を守らざれば、一戒なきに等しである。

浸染既に久しくして、身業に怠慢、一戒を勵むも、ナカ／＼容易でない。自然完壁を期せずば、術者たるを得ないと云ふのではない。尠くとも、只一步、世衆より擢んでゐよ、而して衆を導くと云ふのである。

大正十二年五月五日 印刷
大正十二年五月十日 發行
大正十三年十二月二十日 改訂三版
昭和三年五月廿日 改訂四版

非賣品

不許
複製

編輯人 桂 六十郎
印刷人 高橋 利惣次
印刷所 高正堂印刷所
東京府下北豊島郡高田町雑司ヶ谷九百四十九番地
東京市小石川區指ヶ谷町十二番地
東京市小石川區指ヶ谷町十二番地

發行所

大日本靈學通信學校
東京市外高田町雑司ヶ谷九百四十九番地
振替東京五八四七九番

爾に還れ

爾は陛下の赤子なり
爾は自然の愛兒なり
日と氣と土とに親みて
爾の自然に還れかし

終